



Title	ブラジル・ポルトガル語のesseの用法について
Author(s)	河野, 彰
Citation	大阪外国語大学論集. 1994, 11, p. 67-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79642
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブラジル・ポルトガル語の *esse* の用法について

河 野 彰

Algumas observações sobre o uso de *esse* no português do Brasil

Akira KONO

1. ポルトガル語文法によれば(注1)、ポルトガル語指示詞の体系は次のようである。

(1)

男性形		女性形	
単数	複数	単数	複数
1. <i>este</i>	<i>estes</i>	<i>esta</i>	<i>estas</i>
2. <i>esse</i>	<i>esses</i>	<i>essa</i>	<i>essas</i>
3. <i>aquele</i>	<i>aqueles</i>	<i>aquela</i>	<i>aquelas</i>

ポルトガル語の指示詞は、それが修飾する名詞の「性」と「数」に対応してその語形が変化する。さらに、指示詞は、以下のような用法の相違により、「指示形容詞」と「指示代名詞」に区別されるのが普通である。(注2)

(2 a) *Este* livro é meu. (この本は私のです)

(2 b) *Meu* livro é *este*. (私の本はこれです)

またさらに、英語の指示詞が、*this : that* , *these : those* のように二項対立であるのに対して、ポルトガル語は三項対立であるので、しばしば上記1)の系列は日本語の「これ」、2)の系列は「それ」、3)の系列は「あれ」に対応するものとして解説される。(注3)

本稿の目的はポルトガル語指示詞全般に関する分析を施するものではなく、以下の(3)の例に見られるようなブラジルのポルトガル語に特徴的な指示詞の一用法を、ブラジル語法研究の一環として、解説し、簡単な分析を試みようとするものである。

(3) —Por favor, moço. *Aquele* carro ali é seu?

—Não, o meu é *esse* aqui. (Coudry & Fontão 1989:39)

(A: あの一、すみませんが、あの車はあなたののでしょうか。

B: いいえ、私のはこれですよ。)

2. (3) の会話文に出現する *esse* はどのように解釈すべきであろうか。ポルトガル語では、指示詞を用いる際には、指示関係をより明瞭にするために、しばしば場所を示す副詞 (*aqui*, *aí*, *ali*, *lá* など) が指示詞とともに用いられることがある。したがって (3) の *esse* は *aqui* (ここ: 話し手のそばを指す副詞) と共起していることから、「これ」と解釈すべきであろう。ここでは、本来の *este* の代わりに *esse* が用いられているということになる。このような *este* (および、修飾する名詞の「性」「数」に応じた変異形 *esta*, *estes*, *estas*) が *esse* (および、その変異形 *essa*, *esses*, *essas*。以下、*este* と *esse* で代表させる) で代用されるという現象はブラジルのポルトガル語、とりわけ話し言葉の語法にしばしば見られるものである。この事実はすでに、しばしば指摘されてきたことである。以下にいくつかの記述を引用しよう。

(4) Castagnaro (1989:82)

“Este, etc. normally refer to entities close in space or time to the speaker. Esse, etc. normally are used with nouns close to the person(s) spoken to. Though this distinction is not always observed, the distinction between este, etc. and esse, etc. on the one hand, and aquele, etc. on the other, is.”

Castagnaro (1989) は比較的最近に出版されたポルトガル語の入門書である。ここでは、*este* と *esse* の区別が常に守られるとは限らないという事実が述べられているだけで、それ以上の分析はない。

(5) Ellison et al (1971:529)

*“In informal speech, there is a tendency for the ss forms (*esse*, *essa*, *isso*) to replace the more standard st forms (*este*, *esta*, *isto*) with the result that pairs of statements such as the following may have the same meaning:*

Quero <i>este</i> aqui.	I want this one (here).
Quero <i>esse</i> aqui.	

De quem é esta mesa? Whose table is this?
De quem é essa mesa?

Ellison et al(1971) はブラジルのポルトガル語を対象としたポルトガル語の入門書である。ここで、*esse*を*este*の代わりに用いるこのような用法は“informal speech”における傾向と解説されていることから、我々外国人のポルトガル語学習者はブラジルの話し言葉を注意深く観察していなければ、このような現象を見逃しがちであることがわかる。

(6) Nascentes (1953 2a.:90-91)

“Não há a menor distinção entre os demonstrativos *este* e *esse*. São usadas indiferentemente.

Na realidade, não há grande necessidade de fazer distinções. O italiano tem só *questo* e *quello*, o francês *ce*, acompanhado de *ci* e de *là*. O português e espanhol é que se dão ao luxo de ter um demonstrativo para a primeira pessoa e outro para a segunda.”

(指示詞の *este* と *esse* にはいささかの区別もない。いずれも同じように用いられる。実際、これらを区別するたいした必要性はないのである。イタリア語には *questo* と *quello* しかないし、フランス語は *ci* や *là* に伴われた *ce* しかない。ポルトガル語とスペイン語のみが1人称用の指示詞と2人称用の指示詞を持つという贅沢をしているのである。)

上に引用した Nascentes (1953) は、リオデジャネイロの民衆層のポルトガル語を観察したもので、同書の初版は「はしがき」によれば、1992年であるので、今世紀前半には、すでに、少なくともリオデジャネイロにおいては、このような現象が観察されたことが確認できる。ただここでも、事実の記述のみで終わっている。

(7) Teyssier (1976:114-115)

“Dans le portugais parlé du Brésil, on observe une tendance à confondre *este* et *esse*. Cette confusion se trouve chez les écrivains dont le style s'efforce d'imiter le langage spontané, en général au profit de *esse*.”

ここでも、*esse* のこのような用法は“le langage spontané”に特有であることが了解される。

また筆者がこれまでブラジル人との会話において観察してきたところからも、このような用法の存在は十分に確認できたが、本来規範文法に従えば *este* (およびその変異形) が予想される

箇所には esse (およびその変異形) が出現する事実はいまだ日本人のポルトガル語学習者に十分に紹介されていないようである。(注4)

ところが最近ブラジルで出版された外国人向けのポルトガル語の入門書、とりわけコミュニケーションを重視するタイプのものでは、このような用法が積極的に取り上げられている。そこでここでの分析の資料として、先に引用した Coudry & Fontão (1989) からさらにいくつかの用例を引用しよう。

(8) –Onde você comprou aquelas cadeiras ali?

–No Shopping.

–E essas aqui?

–Essas aí eu comprei de um amigo.

(「あの椅子はどこで買ったの?」)

「ショッピング・センターで (買ったよ)」

「で、これは?」

「それは友達から買ったんだ。」)

(9) (レストランの前での男女の会話)

–Estou morrendo de fome. Vamos almoçar?

–Boa idéia!

–Será que a comida desse restaurante é boa?

(「腹ぺこだよ。昼飯にしないかい。」)

「いい考えね。」

「このレストランの飯は旨いかな?」)

もちろん、este を用いた用例もある。例文 (10) を参照。

(10) –Este livro aqui é seu?

–Esse aí? É meu, sim.

(「この本はあなたの?」)

「それかい? そうさ、ぼくのだ。」)

これらの用例を資料として、esse のこのような用法に関する分析を試みてみたい。

3. 本稿で問題にしているブラジル・ポルトガル語の指示詞の用法を検討してみると、以下の諸点に気づく。1) しばしばそれが場所を示す副詞、aqui (ここ)、aí (そこ)、ali (あそこ) と共

起していること。(上の用例 (10) の este livro aqui を参照) 2) ポルトガル語の場所を示す副詞、aqui, aí, ali も指示詞と同様に三項対立的であり、指示詞と並行していることがわかる。(11) 参照。

(11)	指示詞	場所を示す副詞
1.	este	aqui
2.	esse	aí
3.	aquele	ali

3) esteとesseは相互に置き換え可能ではないこと。(12) 参照。

- (12) – (Este, Esse) livro aqui é seu?
 – (*Este, Esse) aí? É meu, sim.

以上のことから、ブラジルの自然な話し言葉 (le langage spontané) に見られる esse の用法は、例えばフランス語のそれとはおおいに異なることがわかる。フランス語では、指示詞 ce に ci, là が共起するが (ce livre-ci, ce livre-là)、一方、指示詞は二項対立的であるかに見えるブラジルのポルトガル語においても、ポルトガルのポルトガル語と同様に、場所を示す副詞は相変わらず三項対立のままであり、aqui が aí に交代するといった現象は見られない。ブラジルでの esse の用法に関して、しばしばブラジルでは指示詞の体系が三項対立から新しく二項対立へと移行したと分析されることがある。例えば、(7) で引用した Teyssier は引用箇所続けて、ブラジルの作家 Jorge Amado の作品から用例を引用し、それに続けて次のように述べている。

(13) Teyssier (1976:115)

Ainsi naît un système nouveau de type binaire:

esse (este)	aquele
----------------	--------

しかし場所を示す副詞aqui, aí, ali には何等の体系の変更も生じていないことを考慮にいれるならば、ブラジルのポルトガル語における指示詞の体系はむしろ (14) のような体系を成していると解釈すべきではないだろうか。

(14) ブラジルの話し言葉における指示詞の体系

1	esse (este)	aqui
2	esse	aí
3	aquele	ali

ブラジルのポルトガル語における指示詞は1) este, 2) esse, 3) aquele という3系列の形態上の区別を失うことになったが、場所を示す副詞 aqui, aí, ali と共起することによって、三項対立の体系を保持していると言えよう。このことは、フランス語において、指示詞 ce が場所を示す副詞である ci, là と共起する現象と類似のもののであるが、先に述べたようにポルトガル語の場合は、場所を示す副詞が三項対立の体系を成すのに対して、フランス語では二項対立の体系であることが重要な相違点である。

最後に、例(9)に見られるような場合を考えてみよう。(9)では場所を示す副詞と共起していないが、少なくとも指示詞の直示的用法(uso dêítico)においては、場面から十分に判断できるわけであり、先にも述べたように、este はもっぱら esse によって置き換えられるが、その逆は真ではないことから、ブラジルの話し言葉における指示詞の用法はいまだに三項対立の体系を保持していると結論づけてもよいのではないだろうか。

注

- (1) 例えば、Cunha (1983, 10a.:233)
- (2) 指示詞はしばしば人称と関連して論じられることがある。例えば este は1人称に対応する云々。しかしポルトガル語においては、vocé (文法上は3人称だが、聞き手を指し示す)などの例に見られるように、動詞の活用に関わる概念である「人称」と言語活動上の役割を示す「話し手」「聞き手」などを区別しなければならない。したがって、指示詞は「人称」よりむしろ言語活動上の役割を示す概念と関連づけて論じなければならない。表(1)において、1の系列は「話し手」、2は「聞き手」、3は「話し手」「聞き手」以外の場所に位置するものを指す。詳しくは池上(1987)参照。
ポルトガル語では、さらに不変形(forma invariável)あるいは中性形(forma neutra)と称される isto, isso, aquilo といった指示代名詞が存在するが、本稿では扱わない。ただし、この系列の代名詞においても、isso が isto の代わりに用いられるという現象がブラジルのポルトガル語において見られる。
- (3) 例えば、友田(1978:81)
- (4) 試みに我が国で発行されている日本人の著者によるポルトガル語の入門書(その大部分はブラジルのポルトガル語を対象としたもの)を調べてみたが、esse のこのような用法については全く触れられていなかった。

文献

- Castagnaro, R. Anthony: *A Portuguese Primer*, New York; Bern; Frankfurt am Main; Paris, Lang, 1989
- Coudry, Pierre & Elizabeth Fontão: *Fala Brasil: português para estrangeiros*, Campinas, SP, Pontes, 1989
- Cunha, Celso: *Gramática do português contemporâneo*, Rio de Janeiro, Padrão, 1983, 10a. ed.
- Ellison, Fred P. et al: *Modern Portuguese*, New York, Alfred A. Knopf, 1971
- 池上岑夫:『ポルトガル語文法の諸相』、東京 大学書林、1987
- Nascentes, Antenor: *O Linguajar carioca*, Edição da "Organização Simões", Rio de Janeiro, 1953
- Teyssier, Paul: *Manuel de la langue portugaise-Portugal-Brésil*, Paris, Éditions Klincksieck, 1976
- 友田金三:『ブラジル・ポルトガル語文法・作文』、京都、友田出版社、1978

(1994年5月9日 受理)